
 学 会 記 事

第 20 回新潟内視鏡外科研究会

日 時 平成 23 年 7 月 9 日 (土)
午後 12 時 45 分～

会 場 万代シルバーホテル 5F
万代の間

I. 一 般 演 題

1 内ヘルニアに対する腹腔鏡下手術

川原聖佳子・西村 淳・新国 恵也
河内 保之・牧野 成人・北見 智恵
番場 竹生・齋藤 敬太

厚生連長岡中央総合病院
消化器病センター外科

2008 年 1 月から 2011 年 5 月までに当科で手術が行われた内ヘルニアは 12 例あり、そのうち絞扼性イレウスや高度な癒着が無く、減圧が良好で、待機手術が可能であった 2 例に対し鏡視下手術を行った。

〔症例 1〕子宮広間膜裂孔ヘルニアで、腹腔鏡下で嵌頓した小腸を整復後、ヘルニア修復を行い、術後第 8 病日に退院した。

〔症例 2〕大網裂孔ヘルニアで、すでに腸閉塞は解除されており、大網の異常裂孔を切除して終了し、術後第 8 病日に退院した。

2 例とも腸管切除は行わなかった。内ヘルニアは、発症時に絞扼性イレウスであることが多く、緊急開腹手術となる可能性が高いが、限られた症例においては診断と治療を兼ねた腹腔鏡下手術が有用なことがある。

2 巨大肝嚢胞に対し腹腔鏡下開窓術を施行した 1 例

渡邊 直純・野上 仁**・細井 愛
森本 悠太・林 達彦・村山 裕一
岩永 明人*・太田 宏信*

厚生連村上総合病院外科

同 内科*

新潟大学大学院医歯学総合研究科

消化器・一般外科**

巨大肝嚢胞に対し、腹腔鏡下開窓術を施行した症例を経験したので供覧する。

症例は K.Y. 75 歳、女性。

【主訴】腹部膨満。

【既往歴】高血圧、メニエール病。

【家族歴】特記すべきことなし。

【現病歴】H 22 年 8 月食欲不振にて当院内科入院、血液生化学検査では肝機能障害、炎症反応なし。CT では巨大肝嚢胞の診断であった。これによる食欲不振の診断にて嚢胞ドレナージ施行される。細胞診では悪性細胞なく、排液量が減少したので抜去され、症状改善し退院となった。H23 年 2 月再度腹部膨満、食欲不振あり、前回同様の診断にて再ドレナージ施行された。排液は 30～50ml/日、漿液性であった。有症状であったため当科紹介となった。

【経過】H 23 年 3 月腹腔鏡下開窓術施行。組織診では Cyst arising from biliary tract の診断であった。術後経過は良好、症状改善し第 11 病日退院となった。

【まとめ】有症状の肝嚢胞に対する腹腔鏡下開窓術は低侵襲で有用であると思われる。

3 巨大肝嚢胞に対する腹腔鏡下開窓術

皆川 昌広・黒崎 功・小海 秀央
高野 可赴・関根 和彦・仲野 哲矢
高山 勝義

新潟大学消化器・一般外科

症例は 64 歳、女性。

【既往歴】逆流性食道炎。

【現病歴】2010 年 10 月、右季肋部痛出現したため近医受診、その際の腹部エコー検査にて肝嚢胞